

幸福な余生を送っております。

敗戦後のきびしい生活を経験し、その間、北陸電力㈱を五十五歳で定年退職しました。引き続き系列会社の北陸発電工事業に勤務すること七年間、その後、職業訓練校に一年間、電気工事を学修し皆勤賞を貰いました。

その後、地元タクシー会社の集金業務を十三年間引き受けました。仕事なら貴賤なく、真面目に働くのをモットーとしています。

資格免許と電気関係、危険物関係、調理師の免許十種類を取得しました。

戦争と自分

過ぎた時間は

二度と来ない (二)

佐賀県 中島 富夫

昭和十九(一九四四)年三月二十七日、久留米に近い大刀洗飛行場と兵器廠が爆撃を受けた。防空壕の中より監視していると、上空を反転し再び攻撃姿勢に移る多数のグラマン機を発見した。そして我々の部隊の上空に飛来し機銃掃射を加えて通過して行った。

壕より飛び出し確かめたところ一列に連なった弾痕があり、拾った弾丸は一〇センチの長さのあるピカピカの機銃弾であった。警報解除と同時に再び米軍上陸の決戦に備えての戦闘訓練が続行され、水際三キロメートル以内で撃滅するための蛸壺掘り、匍匐前進、棒地雷、箱地雷による対戦車

攻撃訓練が各中隊とも激しく行われた。

このため負傷者、病人も多く出て、我が通信隊では、練兵休の者を集めて外傷手当を行い、薬を与えた後、私はモールス信号の訓練等の指導をした。

九州大空襲下に於て

四月頃よりは、特に本土各都市へ連日の空襲となり、六月十九日には福岡市に大空襲があつて夜空に赤々と燃え上がる炎が久留米からも望見された。

我が隊は福岡県上津荒木村甲塚付近に構築中の仮兵舎に大部分の兵員を移動していたが、降り続く雨量の重さのため、六月二十二日夜十二時、通信中隊の屋根が崩壊し、大半は生き埋めとなった。

他の中隊より緊急に応援を求めて救出に当たった。幸い死者は無く、一部負傷者を部隊本部医務室に引率、手当の後、全員休養室に入れた。

六月二十九日、佐世保市に大空襲があつた。

七月に入って、真夜中に営門衛兵が走り込んできて、「宮の陣地」の田圃に、北京よりの友軍機が不時着したという。重傷の乗員は泥だらけ「破傷風血清を早く求めたい」と南門歩哨は口頭で通報してきたので、久留米陸軍病院の当直軍医殿に、その旨を伝え、その結果、血清は現地へ届けられた。このことも当直日誌に記入した。

後日の話では不時着した友軍機は重要任務で飛来したが重傷で、必死の救出作業であつた。

大牟田は焼夷弾攻撃を二回受け、市街は今だに燃え続けている。市内の玉川小学校の第四十八部隊分遣隊員にアメンバー赤痢患者が発生したが、医療薬品も少なく、このため処置困難で、交替要員の必要ありとの連絡があつて、その引率者に私が命令された。私は十二人を引率して西鉄の久留米駅より大牟田へ向かつた。

大牟田市中は静かで警報発令中で交通整理中の

警官に玉川小学校を教えてもらい、兵員交替で行くことを告げたが、「警報中につき充分気をつけよ」と注意を受けた。

しかし、市内は、あちこちで家屋が燃えているが、消火する人は誰もいない。ようやく学校に到着して上司に報告し、病兵十余人を引率して帰隊した。

次いで今度は、久留米市郊外に外人の強盗出没との連絡が第四十八部隊にあった。早速、兵員二〇〇人の精鋭を集め軍用犬二頭と共に出動した。

先の大牟田空襲の時、高射砲で落とされた敵兵が落下傘で逃げていたことが判明し、軍用犬で追いつき込み包囲して逮捕した。この敵兵はトラックに乗せ第四十八部隊まで連行、直ちに軍司令部へと送られて行った。捕虜は日本空襲を三回行っており、その功績で最近大尉に昇進したばかりの指揮官で大物であった。彼は逮捕されると拳銃を渡し「シガレット」と言い、大人しく何の抵抗もしな

かった、ということの後で捜索隊へ行った者の話として聞いた。

八月に入り通信中隊の幹候の一人が時々無線機に「どうもおかしい通信が入る」と話をするので「何だ」と尋ねても答えてくれない。

「絶対に口外しないから教えてくれ」と頼んだら「よく聞きとれないが、無条件とか、どうするかとか、敵しい事を言っている。ひょっとすると、豪州放送のようだ」と。

いかに戦局が苛烈でも、勝利を信じている我々には何の疑いもなく「最後の勝利あるのみ」であった。

八月十日昼過ぎ、所用があって仮兵舎より久留米市内へ行った時、市民の方が二、三人道路端で新聞を広げて見ておられたので、私は「何ですか」と言って近づくと「どうぞ」と新聞を差し出してくれた。そのまま小さく折りたたんで物入れにしまい、誰も居ない所に来て素早く一人でその新

聞を広げてみると「ソ連参戦」「新型爆弾が広島に投下された」などの記事が大きく載っていた。

私は新聞はそのまま、通りの溝に捨てて仮兵舎に帰った。

久留米大空襲

八月十一日は朝より日本晴れの青空、そして暑い日であった。

仮兵舎医務室でいつもの外傷者の手当をすませ、空襲警報発令中のため山頂付近で見張りをしていた時、頭上で突然の大爆発音がした。はっと身を伏せ静かに見上げると、友軍の高射砲弾が炸裂し、糸状の白線が八方に拡がり、少しずつ白の帯状に変わり、薄白い雲状と変わった。

これは敵機侵入が近いものと思い、仮兵舎に報告をと、下山しかけた時、一〇〇機以上のB29爆撃機の編隊が高々度で久留米西南方向より整然と接近するのが肉眼で認められた。「畜生」と思う瞬間、久留米上空より焼夷弾の雨、編隊は隊伍を

組んだまま北側背振山方向に廻り、今度は横から市内を十文字に爆撃、山腹から見ればあたかも列車の煙が立ち上るごとく、そのあとは円を描き、僅か十五分位でどこかに飛び去ってしまった。

我が軍の高射砲はB29の高々度には届かず、友軍の戦闘機は追いつがりに空中戦を試みたが、一機も撃墜できなかったのが残念であった。我々は直ちに市内の消火、救援に赴くべく、萬軍曹殿を指揮者として全員出動した。市内は右往左往の大混乱であった。

二時間か三時間の活動で鎮火したので引揚げ命令が出て、急ぎ仮兵舎に戻る時、空は夕方のように真っ黒になった。上空より白い灰が落下してくると思ったが、その白いものは、だんだん大きくなり、ビラ（伝單）が落下して来た。

拾って見たら『日本のとるべき途』と書いてある。美しい日本国土を残すのはただ一つだけであり、私はそのビラを足で踏み付けて帰った。

翌十二日昼過ぎ、爆音は米軍機である。急にエ

ンジンの音が止まり大爆発音がした。今日は「やったぞ」と思い監視していたら敵機は有明海に出てから水面すれすれに滑空し、すぐにエンジンを開始して急上昇し、遙か海上に出て逃げ去った。

この日は、筑後川鉄橋破壊のための爆弾投下だったのだ。鉄橋の両翼には守備隊、高射砲隊が守っていたが、幸い目標が外れて被害はなかった。

聖断下る

八月十四日午後、仮兵舎の医務室に「緊急集合」の伝言があり、軍医、軍医見習士官、衛生下士官、衛生兵全員が集合した。

高級軍医殿は静かに「全員聞け、明十五日、重大発表がある。どこのラジオでもよいから必ず聞くように、以上」とだけ話して集会は終わった。

それだけか、何だか変だな、何かあるとの予感がした。あの新聞記事、豪州放送、久留米空襲の

ピラ（伝単）、でも神州不滅、日本が負けることは絶対ないと信じていた。

そして八月十五日は、総攻撃の命令が出るものと信じて、近くの農家、今村米吉さん方のラジオを聞くことにした。

ガリガリという雑音が多く、これが玉音放送かと疑いながらも一生懸命、全身を耳にして静かに聞いているが意味が判らない。ところどころ陛下の声の特徴が響き『耐え難きを耐え』とは陛下の声だと思ったが、総攻撃の命令にしては力が弱い、と思った。

放送が終わり、今村米吉さんが「お茶でも」と言われたが、何も言わず一礼して仮兵舎へ急いで戻った。皆の顔を見たが、ラジオ放送も、人の話も聞いていない。勇ましい軍歌を口ずさんでいた。

やがて夜になり、ラジオの解説者が多くなり、大阪出身の召集兵（一等兵）が「戦争はやんだんと違うか」と大きな声でしゃべる。

「早く帰り、蚊帳を作り儲けたい、今まで、材料がなく紙をこより状にしたものを糸にして網目に編んだものだが、戦争が止んだら少し木綿が手に入ると思うので、良いのができる」と言った途端に、九州出身の一等兵が「貴様！」と一発ビンタを張りつけて大喧嘩となった。放送を全部よく聞いた者も、まだ解説中で考えている状況だった。

時間の経過と共に、実はポツダム宣言の無条件受入れ、全面降伏であったが、そうは言わずに終戦と受け止めるのがやっとの状況であった。ある者は帰れる、ある人は捕虜として使役になると皆悲喜交々の心境であった。

「我々は天皇の軍隊だ！」

久留米西部第百四十八部隊兵器係主任陸軍中尉・脇谷中隊長（通信中隊長）は、八月十五日夜から本部での将校集会の席上で「断固戦争継続論」を強硬に述べられている。また「天皇の玉音

放送であり、命令だから軽率な行為は慎んでくれ」との平和推進派と激論になったと聞いている。

わが部隊の仮兵舎でも両論に分かれた。私は継続派に同意した。他の中隊も大部分は継続派が多く「では、どうするか」となり、長い間決戦に備えて、グリースを塗り固め、大事に壕の奥深く保管した兵器・弾薬を取り出し配布された。これで米軍と一戦を交えて最後の華を飾ることにした。

砲部隊も継続に同調し、高良台で虎の子の野砲を表に出し、八月十六日、十七日と毎日大量の実弾射撃演習が始まり、私共の仮兵舎の医務室上空にも大きな砲弾がゆっくり飛んで行くのが目撃された。

次第にポツダム派の人々は小さくなり、逃げ腰となり、九州のものはほとんど、この地を守るのだと工事を始め、重要書類の焼却、今でも米軍と刺し違える態勢ができた。

各部隊と各中隊間の連絡兵が忙しくなり、まさ

に戦場と化した。しかし、一方では部隊長以下全員は中央や師団から命令が来て「我々は天皇の軍隊である。一兵まで命令に反する事は許されない、承知してくれ」といわれ、残念、無念な思いであった。

八月二十日ころになって、部隊の空気も少し穏やかになり、虚脱感に襲われて、飯を食べない者が現われ出した。復員の話と捕虜となり豪州で麦刈りに送られるという噂が次々と伝えられる。また脱走するのは今だと言って脱走して自宅から憲兵に連れ戻され、重営倉に入れられた者へ、はじめて食事運びをした。

九月に入り復員の話が本格化して、まず郵便局勤務者であった者、炭鉱に働いていた者、警察官希望者、地域別、体力の弱い者、と順次復員該当者が決められ、整然と復員業務が進行していった。

仮兵舎の通信中隊の屋根が崩壊し、最後に救出

された船越二等兵（前郵便局長）は復員第一号者で、別れの挨拶に医務室に現われた。復員証明書の外に、復員に際して下士官三〇〇円、兵二〇〇円、将校には将校集會場で別支給があった。また軍衣上下、略帽、飯盒、水筒、外被、背負袋、毛布三枚、他の物品が支給された。このことは、中隊によって内容はまちまちであったが急ぐ者は何も取らず姿を消した例もあった。

軍馬も十月に入り処分した。一匹二〇〇円、農家にとっては貴重なものであり、支給金二〇〇円で買取り曳いて帰る者もあった。

無敵の名声を天下に轟かせ、創立以来強兵の館であった久留米西部第四百四十八部隊も、十月中旬になり、静かになった。

部隊長殿より表彰うける

賞状

右ノ者部隊復員ニ際シ終始克ク

中島富夫

上司ノ意圖ヲ體シ繁劇ナル復員

業務完遂ニ盡力シ 以テ皇軍ノ

一員トシテ遺憾ナク優秀ノ美ヲ

發揮セリ

因テ茲ニ之ヲ賞ス

昭和二十年十月二十七日

西部第四百四十八部隊長陸軍大佐正五位勲三等

柴田亀三郎

書道半紙に謄写版刷りであります、現在も大切に保管してあります。長年小さく折りたたみ誰にも見せる事もない私の青春をかけた一頁の記念品です。

陸軍衛生上等兵

中島富夫

【解説】

〔承前〕前回のあらまし

体験者は、佐賀県有田町生まれ、家族は四男一

女の子沢山で父は大変な苦勞であったという。そのため執筆者は、鍼灸師の叔父の家での修業と徒弟としての厳しい日々を送った。昭和十二年九月、父親に召集令状が来て久留米の野砲隊（第二師団）に入隊して、十一月、杭州湾敵前上陸戦に参加、南京に向かって進撃した。その父も昭和十五年五月、海南島警備を最後に召集解除となり、無事帰郷した。

戦争は激しくなり、体験記執筆者は、昭和十七年十月、第九次国民徴用令状により、佐世保海軍工廠造兵部水雷科に海軍軍属として入廠、その後、魚雷専門の佐世保海軍工廠川棚分工場の作業係として転出した。

昭和十八年九月、肺結核と診断され、有田の実家に戻ったが、戦況は日毎に悪化の傾向にあり、現役一年繰上げ徴集が決定し、第二乙種合格となり、養生中に鍼灸師試験に合格をしていたため、兵科は衛生兵となった。そして昭和十九年九月、久留米、西部第四百四十八部隊に入隊、直ちに第六中

隊に編入され、衛生兵教育を受け、久留米西部第百四十八部隊通信中隊付衛生兵として配属され、部隊付医務室での診断勤務となった。

勤務中、鍼灸師の免許を持っていたことから、部隊長の腰痛の診療に当たり、部隊長室に出入りするようになり、三月初めには陸軍衛生一等兵となる。

戦況は激しくなり、部隊本部も若干の留守要員を残して大部分は山中の仮兵舎に移り、本土決戦に備えて防空壕掘り、食糧自給のための開墾などを行った。そして内地各地の大空襲に遭遇する(一)。

衛生兵になるには、体験者は、既に鍼灸師としての資格を持っていたため、地方(民間)において衛生に関係していた者として徴兵検査の段階において衛生兵として選抜された。そして歩兵の一期の教育を受け、部隊衛生兵として、六カ月の衛生兵教育を受けたのである。

衛生下士官の教育規定によると、人体生理、軍陣衛生、軍隊防疫、軍隊病、救急法及び繃帯術、瓦斯防護、看護、病理試験、調剤、天幕建設などの教程がある。この中の「看護」では薬物治療、食餌(栄養、病気による食餌)、患者の心理、物理療法、手術業務などがあり、鍼灸法は、この教程に属し、体験者は、部隊長の腰痛を治療するという、その特技を生かして部隊内で重宝がられ、軍隊は運隊であるという体験をしている。

しかし戦況の激化により、部隊は山中へ疎開させられ、米軍の空襲に遭遇する。

九州地区への空襲は、昭和十九年八月ごろより始まったが、当時はまだ中国・成都から二〇〇三〇機程度のB29が長崎、父島などに来襲していた程度であった。しかし、それ以前にサイパン、テニアンが奪回され、B29は十月にはサイパン島に進出し、十一月下旬頃より、マリアナ基地からの日本空襲が開始されている。

このマリアナ基地からの日本空襲も、東京、名

古屋、漸次大阪、中国地区に拡大し、本格的に九州地区へ来襲したのは、昭和二十年に入ってからであった。

体験者が体験した大刀洗飛行場の空襲当時の記録をみると次のように記録されている。

昭和二十年

三月二十七日 マリアナ基地のB 29型一六五

機、大刀洗・大分飛行場・大村航空隊を午前
に爆撃。

マリアナ基地のB 29型一〇四機、倉敷地区・

関門海峡、機雷投下に夜間来襲。

三月二十八日 米機動部隊の艦載機一三〇機、

九州東岸・鹿屋市・鹿児島市・四国を空襲。

三月二十九日 米機動部隊の艦載機延べ五〇〇

機、高知市・松山市・宮崎市・鹿児島市・佐

世保市に午前、午後にかけて来襲。

三月三十一日 B 29型一五二機、大刀洗・大

村・鹿屋の各飛行場を午前爆撃。

というように、体験者の体験した空襲が始まっている。さらに体験した六月十八日の大牟田空襲にはマリアナ基地のB 29型一二八機、二十九日の佐世保空襲にはB 29型一四五機が来襲している。

この大牟田空襲における市内の状況と部隊員の奮闘の状況は体験談に詳しく、部隊員が市内の災害救助に活躍し、市内の悲惨な情景を語っている。

さらに終戦間際の八月十一日の久留米の空襲は、既に米軍基地となった沖繩より、戦闘・爆撃機連合の一五〇機の来襲であり、翌十二日にも戦闘・爆撃機一五〇機が久留米を空襲し、同時に八五機が松山、佐賀市を空襲している。

この久留米空襲には、我が軍の高射砲は高々度で届かず、飛び上がった戦闘機も追いつがるものの一機も撃墜できず、市内の消火、救護にあたった部隊員の頭上からは、米軍の「宣伝ピラ」が舞い落ちてくるといふ終戦間際の何とも語り得ない、終末の情景が描かれている。

そして終戦を迎えた後の内地在住部隊の、外地部隊以上の心理的な当惑・混乱の状況をも語っている。

航空隊勤務衛生兵

岩手県 高橋 俊之

大正十一（一九二二）年四月十二日、本籍・岩手県西磐井郡花泉村野田沖において生まれる。

現役 昭和十七（一九四二）年十二月一日。

予備役 昭和二十年十一月三十日。

兵籍

昭和十八年四月十日、現役兵として第六航空教育隊第八中隊に入営。

四月十七日、病院付衛生兵第一期集合教育ノ

タメ四月十八日ヨリ七月九日マデ第十二航空教育隊ニ分遣ヲ命ズ。

四月十八日、第六中隊ニ配属。

五月二十九日、第一中隊ニ配属替エ。

七月十日、原隊復帰ヲ命ズ。同日、仙台第二

陸軍病院ニ分遣ヲ命ズ。

十一月二十四日、衛生兵教育終了。

十一月二十五日、陸軍病院ニ復帰ヲ命ズ。同

日八戸到着

昭和二十年六月十日、八戸陸軍病院付ヲ命ズ

昭和二十年八月十八日、軍令陸甲第一一六号

ニ依リ復員下令。

十一月三十日、予備役編入。

十二月一日、復員完結。

官等級

昭和十八年四月十日、衛生二等兵。

昭和十八年十月十日、衛生一等兵。

昭和十九年四月十日、衛生上等兵。

昭和二十年六月十日、衛生伍長。

賞典

昭和十八年十月十一日、兵精勤章付与。

昭和十九年五月二十四日、兵精勤章付与。